谷田風土記 86

平澤寺の古絵図

県立大学から西に向かい、美術館から来る道を横切ると、平沢（ひらさわ）という谷があり、『平澤寺（へいたくじ）』という名刹がある。奈良時代の『駿河七観音』のひとつで、行基伝説があるのだが、ここは静岡県東部の駿東郡に属すると言われてきた。由来は『お寺が駿東郡にある寺院の末寺』だからというものであったが、しかし、そうでないことが分かってきた。

『駿河資料』という江戸時代の文献には『御朱印十五石平澤寺領。この寺は有度山にあれど駿東郡に属す』とあり、それが根拠になっているのだが、地元の言い伝えは『家康公のとき、祐筆が誤って駿東郡としたが、神君の朱印を訂正することは恐れ多いと、幕末までそのままになった』というのである。

『200年前の県立大付近』

この話は有度村が昭和３０年に清水市と合併した時、有度地方の歴史を残そうとして出された『ふるさと有度』に紹介されている。同書は県立大学一帯の歴史を研究するうえで貴重な資料となっている。

この『平澤寺』が、文化十五年（1818、すぐ文政となる）に刊行された『駿河記』（桑原藤泰著）に出てくる。この図の左上のあたりが、県立大である。

（希望者には、この絵図の実物大コピーをさしあげます）

（国際関係学部教授・高木　桂蔵）

『駿河記』の平澤寺、左上が現在の県立大である。

健康支援センターがオープンしました!

本年度４月から、学生や教職員、地域住民の健康の保持・増進を目的に健康支援センターがオープンしました。同センターでは、本部、相談室、医務室を備え、5人のスタッフが心身の健康に関する相談や支援を行っています。

去る5月27日には、看護学部棟４階13411教室で同センターの開所記念講演会が開催され、冒頭、西垣学長の挨拶に続き、永井洋子センター長（看護学部教授）からセンターの概要説明及びスタッフの紹介が行われました。その後、引き続き愛知学院大学心身科学部健康科学科の梶岡多恵子助教授が「美しさ＝健康～自らの手でつくりあげる理想の体型と健康～」をテーマに、ボディデザインの流れや食と運動に関するアプローチ等について講演を行いました。

同センターでは、気軽に学生や教職員に利用してもらうよう呼びかけており、皆さんも一度足を運んでみてはいかがですか。

学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎！

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお寄せください。大歓迎します。

事務局経営課・企画スタッフ（管理棟２階）あてにお願いします。E-mail:kikaku3@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集：静岡県立大学広報委員会（事務局　ＴＥＬ０５４－２６４－５１０３）
静岡県立大学ホームページアドレス ： http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています

VOLUME 94
JUNE 2005

HABATAKI
はばたき
UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada,Suruga-ku Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan

inside NEWS

●CONTENTS●

学長就任にあたり…… 1
学部入学式式辞…… 3
誓いの言葉…… 6
大学院入学式式辞…… 7
教員の人事…… 10
２１世紀ＣＯＥプログラム・事業成果・計画…… 11
「都市エリア産学官連携促進事業発展型」の採択…… 13
図書館だより…… 14
外部資金受入状況…… 15
科学研究費補助金採択状況…… 15
研究助成採択…… 17
受賞…… 17
著者紹介…… 17
平成１７年度年間行事予定…… 18
研究室・ゼミ紹介…… 19
留学体験記…… 21
クラブ・サークル紹介…… 23
開学記念行事…… 25
はばたき寄金からのお知らせ…… 26
社会調査士・資格取得…… 26
谷田風土記…… 27
健康支援センターの開設…… 27

学長就任にあたり

静岡県立大学長　西垣　　克

中国から伝わった四文字熟語に、日常的にもよく利用されている「起承転結」があります。このたび静岡県立大学の四代目学長として、就任することが決定したとき最初に頭に浮かんだ言葉でありました。十八年前に静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学が現在の谷田のキャンパスに統合され、新たに静岡県立大学として開学され、早くも来年は二十年という節目の年を迎えることになります。

初代の内薗学長は、新しく切り開かれたキャンパスに現在の県立大学の礎を築かれ、まさにこの「起」に当たる時代を過ごされました。二代学長の星学長は、環境科学研究所、最後の学部である看護学部をそれぞれ整備され、県立大学を総合大学として継「承」発展されました。本年の三月まで学長を務められた廣部学長は、ご専門の強みも生かされて、県立大学の研究活動を飛躍的に発展させられ、２１世紀COEプログラムに選定される陣頭指揮を執られ、その成果は着実に進展しているところであります。文字どおり「転」に相当する県立大学が大いに展開し、発展してきた状況そのものの活躍をされました。

このような三代にわたる名学長の後を受け、四代目は起承転結の「結」に当たるわけで、どのような結末を迎えるのやら、大いなる不安に悩まされているところであります。時代は少子高齢社会へ急速に移行し、大学は学生が湧いてきた二回のベビーブームの時代とは打って変わった冬の時代と言われ、私大では経営が失敗すれば大学倒産とまで言われているのが現状であります。

国立大学が独立法人化されたことを受け、公立大学においても全国的に、同様な法人化による新たな大学の体制が整備されてきています。県立大学も将来的に他の公立大学と同じ法人化の道を歩むことになり、県立大学の最後の学長になると考えられ、言葉どおり「結」を迎えることになります。しかしながら、大学という組織が制度の変革により、そう簡単に消滅しては何のための組織かと言われそうであります。

最後の「結」という文字は、結ぶという意味もあり、古い体制を新しいシステムに結び直すとも解釈できるのであります。中世のヨーロッパに始まったとされる大学という高等教育機関も、社会に存在する一組織として、存在する社会環境の変化に応じて、その時代が要請する役割や機能にしなやかに対応していく必要性も求められています。そこで、この「結」は新しい２１世紀

の大学を目指した、自己変革のつなぎ目として存在する重要な時期と考えられるのであります。

人類の歴史の中で２０世紀は科学の時代と評されていますが、続く２１世紀は精神や心の時代ないしは思索の時代と言われています。ここに、大学の使命を大いに発揮できる機会があります。大学という組織が、この世で価値のあるものであり続けるためには、常に人類の未来を担う未来ビジネスの拠点であり続けることと、人類が考え出すすべての価値を共有できる奥深い思考が展開できる場所であることが不可欠であります。２０世紀の繁栄は、拝金主義と制御能力を超えた技術にもてあそばれた時代とも考えられます。これからの大学は、教育と研究さらに経営をその機能として有していることが求められています。ここで言う経営は、何も一年間の収支決算で利益を出すことではなく、大学という組織総体の存在価値が社会的に高まることを目指し、組織の継続性が担保されることを意味しています。

大学が自立した経営を行うためには、構成員が大学人として自覚的に大学の有する固有の機能を十分に発揮できることが肝要であります。このための環境整備こそが、学長の職責と考えています。県立大学という位置付けは、広く県民がその存在を誇りに思う組織でありたいのであります。

構成員の中で学生諸君が、勉学に十分に集中できる環境整備が最も重要であります。開学以来２０年の歳月を経て、当時より変化した学問領域の変化に対応するためには、老朽化や狭隘な教育環境の整備が急務であります。学生諸君のキャンパスライフのQOLをいかにして向上させるかが、県立大学の「結」を担当する学長としての使命であると考えております。

平成１７年度 静岡県立大学入学式式辞

静岡県立大学長　西垣　　克

静岡県立大学のキャンパスの桜が、今日ほど入学式に併せて咲き競ったことは私の記憶にないことであります。この記念すべき良き日に、静岡県立大学の設置者でも在られる石川静岡県知事、八木静岡県議会副議長、渥美静岡県立大学後援会長をご来賓としてお迎えし、平成１７年度静岡県立大学入学式を春爛漫の中で挙行できますことは、真に喜びに耐えないところであります。

まず最初に、ただいま本学への入学を果たされた５学部551名の新入生の皆さん方に対し、学長として本学を構成する全ての教職員を代表して、心からのお祝いを申し上げます。これから、共にキャンパスライフを過ごす新しい仲間として歓迎の意を表したいと思います。

また、本日ご列席を賜りました新入生のご家族の皆様方におかれましては、ご本人以上に心待ちにされたこの日をお迎えになり、そのお喜びもいかばかりかと拝察申し上げ、心からお祝いを述べさせていただきます。

さて、本日新入生の皆さん方を県立大学にお迎えする歓迎の言葉として、二つのことを申し上げたいと思います。最初に大学で学ぶ間に、確固たる自我を形成して頂きたいと言うことであります。二番目は様々に変化する社会環境に柔軟に対応できる適応能力を身に附けて頂きたいと考えております。今日、このキャンパスに最初の一歩を踏み出された時に、どのような感想をもたれましたでしょうか。高校時代の勉学が報われた、新しい学問を学べる、漠然と大学という未知の世界への期待と不安を感じるなど思いは様々であろうと思います。

私は、一年目は門前払いを受け二年目に門は開かれ、やっと到着したなという思いでした。最初にやりたかったことは、高校の恩師に説教をされいろいろな本を読むことができなかったことをやろうと考えていました。恩師は、とにかく大学に入学してから思う存分読むがよいと諭してくれたのです。その中の一冊の本に、近代哲学の父といわれるフランスの哲学者のデカルトの本がありました。本の題名は方法序説で岩波文庫の本当に薄い本で、はじめて手にする哲学書でありました。最初の感想は、なんか考えようによっては当たり前のことが書いてあるなというものでした。

しかし、学生や大学院生の教育に当たるようになって、何か手ごろなものの考え方を理解してもらうための本はないかと探してみて、改めて読み直してみました。そこで、この本が書かれた時代背景や、合理的な思考とは何かということを再認識することになったのです。この本に書かれていることの中で、最も有名なことはわれ思うに、われありという言葉です。この世の真理を求め、まずは全てのことを疑うことから思考をはじめ、最後にこの考えている自分はその存在を否定できないというところに至ったわけであります。早分かりの浅知恵を戒めているとも考えられます。

しかしながら、人間という動物にとって自分を認識するということは、そう簡単なことではありません。アメリカの文化人類学者のクラークホーンは、人間のための鏡という書物を書いていますが、自分という存在を考える上で大変参考になる考えを提示しています。もしこの世に鏡という道具が無ければ、われわれは自分の顔すら認識することは出来ないのであります。まして、思考や文化さらに社会を認識することは一層困難になるのですが、これを解決する方法として、他人や異なる文化社会を鏡として利用することで、認識することができると提案しているのです。外国にでかけると、自分は日本人だと認識することがよくありますが、国内でもところ変われば品変わると表現されているのも、同様な考えであろうと思います。

そこで、皆さん方には大学でより多くの友人と出会い、先輩や教員の方々を鏡として自分を認識する鏡として活用して頂きたいと考えているのです。この世には様々な人が多様な生き方をしていることを理解し、自分流を作り出してほしいと期待しているのです。私は人間には二回の離乳が必要だと考えています。一回目は、既に皆さん方は済まされていますが生理的離乳であります。お母さんの母乳から徐々に離乳食そしてみんなが食べているものへと離乳は進められてきたと思います。

二回目の離乳の時期は、大学に入学した今がその時に当たるのです。これは精神的離乳と勝手に呼んでいますが、知的自我を形成するきわめて重要な時期であります。このときの離乳食は、古典といわれる書物と、よき友人や先輩と教職員であります。本学には良好なこの離乳食はそろっておりますので、新入生の皆さん方は大いなる食欲で積極的に食べて頂きたいと望んでいるのです。一人の人格として、自分の完成を用いて情報を収集し、自分の頭で考え、自分の言葉で表現できる人物を目指して頂きたいのです。これから大きく変化していく社会の中で、付和雷同ではなくゆるぎない自我を構築するように心がけていただきたいと願っているのです。強固な自我、知的な自我というものは決して頑迷ということと同じではありません。

二番目の話題は、刻々と変化する社会や環境に柔軟に適応する能力を、身につけていただきたいということです。我が国の高齢社会への移行も、当初の予測をはるかに超える変化をしてきております。今日では、少子化現象が重なりよりいっそうこの問題は深刻なものになってきていることは、皆さんよくご存知のことと思います。昨日も我が国が世界一の長寿国家であると報道されましたが、以前に比べて何か素直に喜べないほど事態は進んできているのです。

過去に依存しぶら下がっているだけでは問題は解決しないどころか、状況は悪化するばかりであります。我が国の近代的社会保障制度も、いまや崩壊寸前のところに来ています。将来新入生の皆さんが高齢になった時には、昔年金制度というものがあったらしいねというのが、老人ホームでの会話になると思います。戦後６０年を経て営々と築いてきた様々な制度や仕組みが、いわば制度疲労ともいえる状況に立ち至っているのであります。

皆さん方をお迎えした大学という制度も、社会保障制度と同様な問題に直面しているのが現状であります。戦後の高等教育が根本から見直され、大学の社会的な存在意義に対して、国民の信頼感は大きく揺らいでいるといっても決して過言ではありません。第二次大戦後、欧米の多くの国と同様に高等教育の一般化や大衆化といった現象が我が国でも生起し、安直に大学という名前だけの教育機関が乱立した、付けが回ってきているのです。

物の生産や消費と同じように大量生産消費の文化を市場価値として進めてきた高等教育の制度が、現在大きく軋みを生じてきているのです。資源の限界性や有限性と効用性を考慮した制度の構築が模索されてきています。大学という場は、古くはギリシャのスコラや中世ヨーロッパに開設されたユニバーシティなど、新たな真理の探求や知識の創造を試みる場所として機能してきたと考えられます。温故知新という言葉がありますが、人類の知的財産をいかにして豊かにするかが大学の重要な使命と考えられるのです。大学では、何を学ぶかだけではなく何を創り出せるのかが問われているのです。大学は未来を志向する知識産業の場でもあります。

県立大学においても、いかなる社会でも存在価値のある大学として存続し、県民の皆さん方からその存在が、文化的精神的な誇りとなるような大学を目指して普段の改革に取り組んできているところであります。

今日の大学における機能は教育と研究活動だけではなく、大学の機能を継続的に持続していくための経営という側面が大変重要な要素になってきています。そのひとつの方策が法人化という方法であります。既に、国立大学は昨年度から全国一斉に独立法人国立大学と名称も変え、生き残り競争といわれる大学改革を真摯に取り組んでいるところです。全国の公立大学においても、国立大学と同様な取り組みが始まっており、２１世紀の高等教育をどのようにして担い、達成していけるかが大きな課題となっています。

今後、新入生の皆さん方はこのような大学改革のうねりの中で、どのように適応し初期の目標を達成していくかが重要な学習となると思います。いわば、卒業してから社会の荒波にもまれる準備を大学内で学ぶことができるのです。ただし、この改革派大学の本質を忘れて経営のみに走るというものではありませんし、目先の華やかな部分のみに光があたるというものでもありません。大学を構成する全ての人々の英知を結集し、将来的に存在意義のある大学へと変革する事業であります。

私はこの改革の最も重要な目標は、新入生の皆さん方を含め全ての学生諸君のキャンパスライフのQOLを、いかにしてより高いものにするかということに置いています。QOLという言葉は医療や福祉サービスの分野で日常的に用いられていますが、クォリティオブライフという英語の頭文字をとったもので、生活の質と訳されています。疾病の治療という目的だけでサービスが提供され、医療を受ける人の日常生活を考慮しないといった従来の古い医療のあり方が批判され患者中心の医療や治療の目的が、その人の生活の質を上げるものでなければならないという、今日的なサービスのあり方を示す重要なキーワードです。大学において提供されるサービスも、同じような考え方でいくべきと考えているのです。

県立大学の評価として、皆さん方が入学してよかったといっていただけるような大学改革を目指しているのです。このような大学を創っていくためには、教職員の努力だけでは実現できないものです。大学を構成する最も重要な構成員である皆さん方と一緒に創出していくことが不可欠と考えています。学生は授業だけを聞きに来る、お客さんではないのです。主体的に所属する大学を、次の世代へ引き継いでいく責務も担う必要があるといえるでしょう。

静岡県立大学は、大正５年に開設された静岡薬科専門学校に始まり、幾多の変遷を経て今日の大学へと発展して来ました。この長い歳月の中で培われたよき伝統を引き継ぎ、新たな校風を創り出していくことが現在の大学を構成する全ての人々に課せられたおおいなる使命と考えております。

大変幸いなことは、本日ご来賓としてこの入学式にご列席いただいている、本学の設置者であられる石川静岡県知事は、常日頃その高い識見と大学への深いご理解により、この度の大学改革を進めるにあたって様々な配慮を講じられていただいております。また、同様に八木県議会副議長をはじめとする県議会の皆様方にも見識ある対応と様々な支援をして頂き、近隣の公立大学に比して大変恵まれた状況で県立大学の改革を進めることができることを、心から感謝申し上げたいと思います。

現状の県立大学を、将来も長期にわたって自立した持続可能な大学に変革させていく事業は、粘り強く幾世代にも亘った事業が不可欠であります。この改革の初期には、決して拙速主義に陥ることなく長期的なビジョンに基づき実践を続ける覚悟が必要になります。さらに社会の変化に立ち遅れることなく、適切なスピードと時期を見た的確なタイミングを取ることが肝要と考えております。

新入生の皆さん方がご卒業になるころには、少しでもいい大学になっているようにしようではありませんか。必ず、卒業してよかったと皆さん方に評価していただけるように、最大限の努力をすることをお約束すると同時に、皆さん方と一緒にこの壮大な夢の実現に向けて、実りあるキャンパスライフを過ごしていただくことをお願いいたして、式辞とさせていただきます。

平成１７年４月８日

誓いのことば

入学生代表　薬学部１年　大橋健人

春の光が暖かく感じられる今日のこの日に、私達は憧れの静岡県立大学に入学することができました。

本日は私たち新入生のために、このように盛大な式を行っていただき、誠にありがとうございます。

また、ただ今は、西垣学長先生、石川県知事、八木県議会副議長から温かく、心強い激励とお祝いのお言葉をいただき、新入生一同大変感激しております。心からお礼申し上げますとともに、今日の新鮮な気持ちをいつまでも忘れず、常に高い志を持って、勉学に勤しみ、静岡県立大学に新たな風を吹き込みたいと思います。

さて、IT社会という言葉が生まれて久しくなりますが、私達世代もコンピュータに関わりながら成長してきたと言っても過言ではありません。現在は、多くの情報を瞬時に得ることのできる便利な世の中となっています。しかし、これからはコンピュータに頼ってばかりいるのではなく、人間の感覚である五感を生かし、あらゆる分野にアンテナを高くして学んでいかなければならないと思います。

また、現在、２１世紀で初めての万国博覧会が、自然の叡智というテーマのもとで行われており、「自然」に対して注目が集まっています。地球温暖化や酸性雨などの問題が深刻化していく中で、「自然」と共存していくことは「自然」からの恩恵を得て生きている私達にとってとても大切なことであり、私達に課せられているテーマでもあります。

「自然」との共存という点では、これから私が学んでいく薬学についても例外ではないと思います。薬で自然のものと言うと、まず「漢方」が挙げられますが、静岡県立大学には薬草園があり、約800種もの植物を栽培していると言うことをうかがい、「漢方」について学ぶには最適の場であると思いました。これを最大限に利用していけば、よい研究をすることができ、将来はその研究した成果を社会に還元できるのではないかという想いを抱いて、私は静岡県立大学薬学部を志望しました。

本日、入学を許可されました551名は、薬学・食品栄養科学・国際関係学・経営情報学・看護学と志す分野はそれぞれ異なりますが、素晴らしい未来を創造していくため、日々研究と修養に励んでまいります。

私達は、今日から大学生として新たな一歩を踏み出します。大学生活を充実したものにするためにも、しっかりとした目的意識を持ち、前向きに、積極的に物事に取り組んでいきたいと思います。そして、将来社会に貢献できるよう成長していきたいと望んでいます。

そのためにも、学長先生を始め、諸先生方、諸先輩方の良きアドバイス、厳しい御指導をお願いいたしますとともに、今日の決意を常に忘れず、日々精進して参りますことをここに誓いまして、誓いの言葉とさせて頂きます。

平成１７年４月８日

平成１７年度 静岡県立大学大学院入学式式辞

静岡県立大学長　西垣　　克

　それぞれに学部を卒業されたり、何らかの形で社会的に御活躍の後、また改めて大学院に入学された皆様方に対して、静岡県立大学を構成する教職員を代表して、学長として心からお喜びの言葉を申し述べさせていただきます。今日は、たいへん桜が満開でございまして、まさに春爛漫の中での入学式ということになりまして、私の記憶の中でも、これぐらいうまくマッチングした年はないのではなかろうかと思っています。そういう意味では皆様方の日頃の行いと言いますか、行状すべてがたいへんよかった結果であろうかと思っております。皆様方のお顔を見ているとやはり一人前だなというお顔をしていらっしゃると思いますので、ある意味ではそれぞれの御専門の中で専門家としての基礎というものができているという前提でお話をしたいと思います。

　これから皆様方は、それぞれの分野でより高い専門性を求められた上で、将来的にはより上級の職業人でありますとか、研究者になるとか、教育者になるということで本学の大学院に入学されただろうと推察しております。その中で、ぜひ、心がけていただきたいことを２、３申し上げて式辞に代えさせていただきます。

　私も同じような過程を経て、ここに今立っているわけでありますけれども、まず最初に今まで持っておられるような経験とか知識というものを１回全部捨ててみたらどうかというアドバイスをしたいわけであります。と言いますのは、今日、いくつかのエピソードをお話ししようと思っているわけですけれども、私が大学院なり学部で学んだことというのは、医学的な知識もさることながら、今日の歳になるまでには、大半のことが否定されてきているということがあります。これは、科学技術の進行ということが我々が考えている以上にすばらしいという結果でもあろうかと思いますが、まず、ある事実をもとにした論理性ということを考えれば、やはり、思考が足らなかったのかなと言わざるを得ないところがあるわけであります。

　私は、非常におもしろいと思ったのは、昔、やはり顕微鏡でいろいろなデッサンをさせられたときに、今で言うミトコンドリアというものが存在しているということを確かに習ったわけであります。その段階で、ミトコンドリアとはどういう存在なのか、何のためにあるのかという質問をしても誰も答えられなかったわけですね。実はミトコ

ンドリアの発見者のミッチェルは、科学の世界では、３５年ぐらい経ってやっと社会的評価を受け、後にノーベル賞を受賞するということになるわけです。なぜ、このようなことを言うのかというと、このミトコンドリアのＤＮＡから、我々が今まで知り得なかったことがいっぱいわかってきたということがあるからです。

　例えば卑近な例で申し上げますと、ホモサピエンスが３万年ほど前に、それぞれの旧人・原人といわれている人から分かれてきたということがわかっているわけでありますけれども、私どもが習いましたときは、世界同時多発説というのが主流でございました。ですから、私も仕事で行っておりました西アフリカのサハラの南の方の中央の草原のところに生息していたと考えられているアウストラロピテクスから徐々に進化をしてきたという説明を受けたわけです。けれども、その中で北京原人、ジャワ原人、日本では明石原人というものも３０万年ほど前にいたというふうに考えられていますけれども、これも怪しいという説もあります。そういう中で、世界同時に人類の祖先が同じように進歩してきたというふうに教科書に書いてあったし、習ったわけであります。しかしながら、現在では、アフリカの東アフリカと西アフリカのちょうど真ん中の中央アフリカの草原に住んでいたアウストラロピテクスから、徐々に今日の人類の生息域まで流布していったと考えられているわけでありまして、これがわかったのは、ミトコンドリアのＤＮＡからわかってきたわけでありますね。その象徴的な、あるいはバーチャルなことと申し上げてもいいかもしれませんが、我々共通のお母さんを何と呼んでいるかというと、ミト

コンドリアイブと呼んでいるのですね。そういう意味で、まさに人類は皆兄弟なわけであります。

　けれども、昔はそんなことを言ったら、「おまえは何を言っているんだ。」ということになりますが、今では、はっきり科学的な証明が可能になったということであります。これは、ついこの前まで述べられていた説が短期日の間にひっくり返ったということになりますし、同じようなことは、我が大学院の中にも薬学、食品でＤＮＡの日本でも有数の研究をなさっている先生方がいらっしゃいますが、あの小さなＤＮＡというものからいろいろなことがわかってくるわけですね。例えば、我々人類の生まれというのは、ある意味では生物学的にいうと極めて偶然の賜物なのですね。確率論的に言えば、750億分の１ぐらいの確率で我々が生を受けているわけであります。ところが、我々は生き物でありますから、必然としての、又、絶対的な現象としての死を向かえざるを得ないわけであります。したがって、皆様方の人生は、偶然から始まり、必然に終わる谷間が人生であるということが言えようかと思います。

　さらに、人が亡くなった場合に、どのような行動をとってきたかということを考えますと、これは、カリバリズム、すなわち人肉風習という現象として知られております。この人肉風習というと、とんでもないというふうにお考えかもしれません。今、アメリカの牛肉を輸入するかどうかで政治的に揉めておりますけれども、いわゆる狂牛病という病気ですね、これに極めて近似した現象というのがパプアニューギニアで観察されているわけであります。これは、「クールー」という病気で、ＢＳＥと同じように小脳に病変が起こってくるものです。なぜ、それが起こってくるかということを疫学的に調べますと、パプアニューギニアでは、人の肉をある儀式として食べる習慣があったわけです。これは、ある意味では食欲を満たすというよりは、「ガード・スピリチュアル」というか戦場で倒れた勇者の魂を受け継ぐという儀式なわけで

す。その中で、男性は筋肉しか食べないのですが、子供と女性は臓物を食べていたのですね。したがって、子供と女性に「クールー」の発生が非常に多かったということで、人為的にＷＨＯも協力したり、オーストラリア政府も協力したりということで禁止をしたところ、現在では、「クールー」の発生が止まったという事実があるわけです。もちろん、ＢＳＥに関してもいわゆる痴呆症として知られているアルツハイマー病と極めて近似しておりますし、この原因物質も未だに実は決着がついていないのですね。非常にこれはおもしろい増殖をしますから私なんかも皆様方の歳にもし戻ることができるのなら、これはやってみたいなという対象の一つであります。けれども、実は、専門という道を歩んでいけば、よりその専門に詳しくなるかというと意外とそうではなくて、何がわからないか、何がまだ説明がつかないかということが実によくわかってくるということになろうかと思います。例えば、アフリカの草原にいた時代には、隣の部落の人々は、ある意味では食糧であったわけですね。すなわち、お互いにホモサピエンスという認識がなかった。もし、それがそのまま遺伝子的にインプリンティングされているとすればえらいことが起こりまして、確か我々の同級生は、４月８日には204人いたけれども、卒業式には５人しかいなかった。それでは、後の199人はどうしたんだ。残った５人が皆食ってしまった。ということになってくるわけでありまして、とても研究どころではないということになりますね。薬学で試験管を振っている間に食べられてしまうという恐ろしいことが起こってくるわけですが、そういう風習がなぜ止まったかということが長い間の謎でありました。遺跡から推定する段階で、ネアンデルタール人の時代、今からだいたい２０万年ぐらい前でありますけれども、その時代にどうやら葬式ということをやっていたらしいということが推定されたわけですね。けれども、それは、あくまでも形態的な認識でしかなかった。ところが、昨今のＤＮＡ分析、すなわち遺跡の周りの土をすべて分析にかけたわけですね。そうするとあることがわかったわけです。どういうことがわかったかというと、その土の中に花粉が含まれていることがわかったわけであります。その花粉は、どういう植物の花であるかということを調べていきますと、単純に考えるならば、そのお墓を造った周りに咲いている花であれば、お花畑の中に墓を造ったという理解になろうかと思います。しかし、実はその花というのは、我々日本人も仏様にお供えする場合には仏前花という名称で特別な花を捧げるわけですが、それと同じことをどうやらネアンデルタール人もやっていたらしいということがわかってまいりました。すなわち、お墓にのみある

特殊な花の花粉が発見されるという事実がわかったわけであります。その花を現代の社会でその地域で現存しているものと置き換えていきますと、わかりやすく言えば遠い山のてっぺんの方に咲いている花であったということがわかったわけですね。ということは、これは何を意味しているかというと、その時たまたま居住していた地域の花が植わっていたところに埋めたのではないということですね。お墓を掘って、死者を弔うということにおいて、改めてその神聖なる花を採りに行ってお供えしたということであります。ということは、ネアンデルタール人の知能の思考の中には、あくまでも人間の死というものを深く認識していたということがわかってまいりました。

一つ余談になりますけれども、わが国の言葉の日本語というのは、表意文字であると言われております。けれども、必ずしもすべてがそうではありませんし、昔の偉い国学者で、本居宣長という方がおられますが、この方は、見抜いていたというふうに申し上げてもいいわけですが、古代万葉語というのは、意にあらず、音にありということを解明しているわけですね。これは、現在、計量言語学という分野でコンピュータによる組み合わせ配列を計算した結果は確認されていることですが、実にそういう道具がないときに、そういう提案をしているわけですね。これは、賀茂真淵からヒントを受けたと通常言われておりますが、そう言う意味では、日本人の持っている洞察力も大したものだと思うわけです。例えば、「死」と言う言葉に関しては、漢文学者の有名な先生がこういう解説をしております。「死」というのは「Ｓｉ」なんですね。これは、意味にあらず、音にありと書いているわけであります。これをずっと辿ってまいりますと、古代ビルマ語、それから古代トルコ語に極めて近いということでございまして、基本的には、我々が海外に行きましても喧しいときにみんなで言う「Ｓｉ」という音に出発点があるのではないかという解釈をされております。ですから「死」という漢字は、完璧に当て字であるということになろうかと思います。

そういう意味では、先ほど申し上げました学部での教育というものをもう一度疑い直していただきたいということと、ある意味では技術に負けてですね、ある現象で早わかりの浅知恵ということで物事を窮めていくということを慎んでいただきたいというふうに思うわけであります。また、Ｃ．Ｐ．スノウという方が「２つの文化と科学革命」という本を書かれています。その中で、２０世紀の時代を皮肉っているわけでございます。ちょうどローマ法王がお亡くなりになりましたが、中世からルネッサンスに至るまでは、法王庁が絶対的な権限を持っていたわけですね。そういう意味ではその時の科学者というのは、ガリレオ･ガリレイを含めて命懸けで真実を探求したわけであります。その時には、法王庁が絶対的指針を示していたのが、２０世紀になると、いわゆる神の職というものから科学者という名前の職の人に絶対的基準が移りすぎたんだということを反省を込めて記述しているわけです。似たようなことは、有名なアインシュタインが後で述懐したそうでございますけれども、私が発見した事実をもとにして、原子爆弾が作られたということであったならば、私はあれを研究したくなかった、研究すべきでなかったということを言っているわけです。これは、仮の話ですが、アインシュタインがやらなくても誰かがやったのであろうと思います。そういう意味では、ホモサピエンスというのは、知的好奇心を持っている動物の一つでありますから、謎を探求するということは非常に重要なことでありますけれども、その謎を我々がどう制御し、その成果物を本当に人類の幸せのために使えるかどうかということも、これからは考えていかなければいけない時代になっているのだろうと思います。

皆様方が学部の頃、お読みになったかどうかわかりませんが、ニーチェの「ツァラトゥストラはかく語りき」というたいへん有名な本がございます。その一節におもしろい表現がされています。「もし、君が真実を求め、真理が潜んでいる深淵を覗くならば、君がその真理を覗いているのと同じ程度に真理のほうも君たちを覗いているのだよ。」と。擬人化的に申し上げれば、真理という方もおまえには真理を解明されたくないよと、真理を解明するならそれくらいの品性を持ってこいよということを述べているのかもしれません。そういう意味では、これから皆様方は、今までの一般教育から比べますとより専門という狭い細い通路に入っていくわけでありますが、その中では、ニーチェが言うごとく、真理に照らし合わせて、恥ずかしくない科学者としての人間性や感性を十分持ち合わせた上で、今までにない、まだ謎がいっぱいありますこの地球上の出来事、病気の克服、様々なテーマに果敢にチャレンジをしていっていただきたいというふうに思っております。私は、学長として皆様方の教育や研究活動を含めた大学院生としてのキャンパスライフのQOLを今よりも数段上げていく責務を負っていると認識しております。したがいまして、皆様方にとってより良い教育環境、研究環境の中で立派に目指された研究テーマが成熟する、習熟するということをお願い申し上げまして、私の式辞に代えさせていただきます。

平成１７年４月８日

教員の人事

就　任

（4月1日付け）

西垣　　克　学長
小寺　栄子　看護学部長
木苗　直秀　生活健康科学研究科長
中山　慶子　附属図書館長
木村　正人　学生部長
吉岡　　寿　評議員（環境科学研究所）

（5月1日付け）

野口　博司　評議員（薬学部）
出川　雅邦　評議員（薬学部）
加治　和彦　評議員（食品栄養科学部）
玉置　泰明　評議員（国際関係学部）
武田　修一　評議員（国際関係学部）
樋口まち子　評議員（看護学部）

（6月1日付け）

辻　　邦郎　副学長
稲山　敏則　副学長

（6月8日付け）

三輪　匡男　薬学部長

（6月17日付け）

奥　　直人　薬学研究科長

採　用

（4月1日付け）

伊藤　邦彦　薬学部教授
賀川　義之　薬学部教授
菅　　敏幸　薬学部教授
山田　　浩　薬学部教授
川島　博人　薬学部助教授
内田　信也　薬学部講師
隠岐　知美　薬学部助手
市川　陽子　食品栄養科学部助教授
星野　昌裕　国際関係学部助教授
伊藤　一頼　国際関係学部講師
山浦　一保　経営情報学部講師
岸　　昭雄　経営情報学部助手
上野　雄史　経営情報学部助手
金澤　寛明　看護学部教授
門脇　千恵　看護学部教授
岡本　恵里　看護学部助教授
井下　裕子　看護学部助手
塩川　和美　看護学部助手
坂田　昌弘　環境科学研究所教授
坂口　眞人　環境科学研究所教授
戸塚　規子　健康支援センター教授

（6月1日付け）

赤井　周司　薬学部教授

昇　任

（4月1日付け）

海野けい子　薬学部講師
丹治　健一　食品栄養科学部教授
一ノ瀬祥一　食品栄養科学部助教授
小幡　　壮　国際関係学部教授
芹沢　幹雄　経営情報学部教授
渡邉　貴之　経営情報学部講師
竹中　厚雄　経営情報学部講師
鈴木　啓子　看護学部教授
奥野ひろみ　看護学部助教授
下位香代子　環境科学研究所教授
伊吹　裕子　環境科学研究所助教授

（5月1日付け）

森田　克徳　経営情報学部助教授
武藤　伸明　経営情報学部助教授

（6月1日付け）

五十里　彰　薬学部講師

任期満了

（3月31日付）

廣部　雅昭　学長
大野　　忠　副学長

退　職

（3月31日付）

中野　眞汎　薬学部教授
鈴木　邦夫　薬学部教授
増澤　俊幸　薬学部助教授
尾形　雅君　薬学部助手
大石　邦枝　食品栄養科学部助教授
駿河　和仁　食品栄養科学部助手
福永　有夏　国際関係学部講師
奥薗　秀樹　国際関係学研究科助手
鈴木　竜太　経営情報学部講師
碇　　朋子　経営情報学部助手
木村　忠直　看護学部教授
北村キヨミ　看護学部教授
椙山委都子　看護学部講師
志賀　由美　看護学部講師
清水　嘉子　看護学部講師
小坂美智代　看護学部助手
永田　文子　看護学部助手
相馬　光之　環境科学研究所教授
大石　悦男　環境科学研究所教授
五島　廉輔　環境科学研究所教授
杉山　千歳　環境科学研究所助手

２１世紀COEプログラム「先導的健康長寿学術研究推進拠点」

―食・薬融合研究のさらなる展開をめざす―

２１世紀COE　拠点リーダー　生活環境科学研究科長　木苗直秀

平成１４年度に文部科学省より採択された本学２１世紀ＣＯＥプログラム「先導的健康長寿学術研究推進拠点」は、健康の維持・増進と疾病予防をめざす大学院生活健康科学研究科と医薬品の創製と活用により疾病治療をめざす同薬学研究科が「食薬融合」を共通の認識として世界最高水準の学術研究および国際的に通用する若手研究者の育成を積極的に進めている。さらに、基礎研究の成果については産学連携による応用・開発にも力を注いでいる。

本年４月に学長が廣部雅昭先生から西垣克先生に交代し、さらに事業推進担当者として渡辺達夫先生と武田厚司先生が加わった、西垣学長は「昨年実施された中間評価において研究実績が高い評価を受けたことから栄光のゴールをめざして協力・支援体制を充実させたい」と話されており、残りの２年間における研究・教育のさらなる展開が大いに期待されている。

平成１６年度の事業成果と平成１７年度の事業計画を以下に述べる。

[平成１６年度の事業成果]

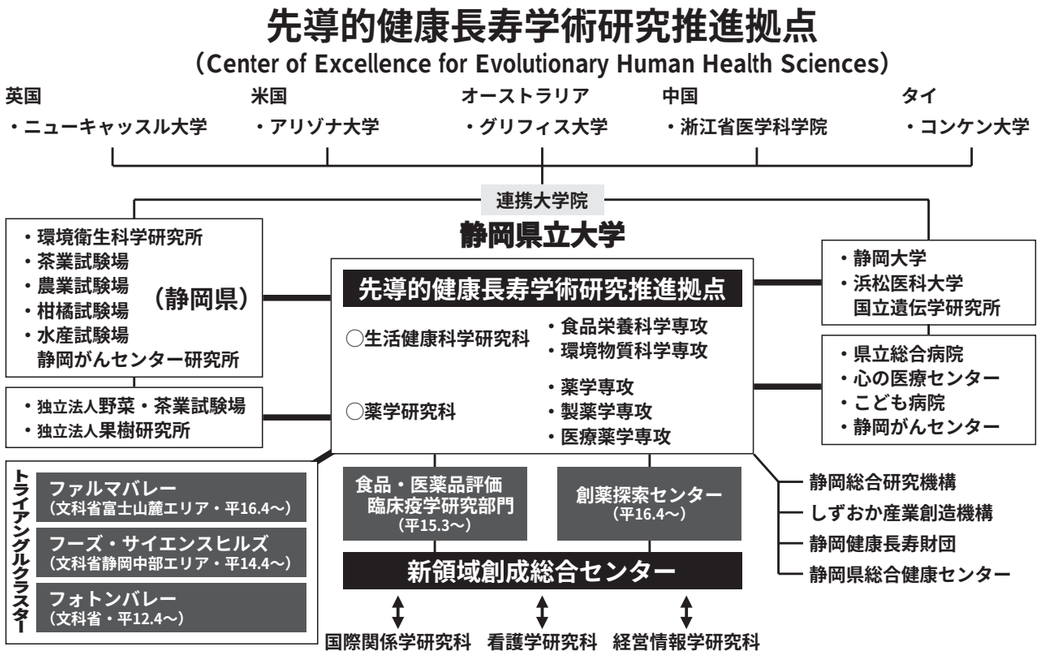
本事業を遂行するため、次の４つの研究領域に重点を置いている。研究領域 １：食品と医薬品の相互作用の解明、研究領域 ２：高次機能性食品の開発とそれをシーズとした創薬への取り組み、研究領域 ３：食薬併用時の機能性、薬効、安全性の高感度評価法の開発、研究領域 ４：ヒトへの大規模な介入試験と、それを通して食薬融合を理解できるアドバイザリースタッフの育成。研究領域1―3については順調に達成されてきており、このことは発表された学術論文の量と質（英文学術論文219報、IFの合計480.3）にも反映されている。さらに、大学院学生による海外での研究発表数が２６題と漸次増加している。研究領域４については、小規模ヒト介入試験を進めており、大規模システムの実施上の問題点を解明するとともに医療チームスタッフ間の効率的な連携体制の構築に努めている。これらの事業を通して、「薬食同源」を理解できる独創力豊かな若い科学者の育成をめざしている。

平成１４年度に設置した研究者間の意見交換・相互評価の場である拠点研究者会議、COE関連事業を吟味・決定する学長を委員長とした運営会議を定期的に開催するとともに、学外アドバイザーによる研究計画・成果に対する助言・評価などを積極的に受けた。さらに、ポストドク制度およびTA制度を充実させ、経費の１５％を電子ジャーナルおよび検索システムの導入に当てるなど研究教育環境の一層の改善に努めた。その結果、本拠点の両研究科は国内外の大学院学生から注目される存在となり、博士後期課程の学生数が増加している。

本拠点が中心となって開催した国際シンポジウムや国際共同研究等を通して、「薬食同源の視点を持つ健康長寿科学研究」に対する諸外国の関心の深さ・評価の高さを認識し、本拠点の国際的な重要性が益々高まっていることを実感した。

[平成１７年度の事業計画]

拠点研究者会議、運営会議、学外アドバイザー（１名増員して計４名）による研究計画に対する助言・評価を積極的に取り入れて本拠点のより一層活発な運営と研究・教育活動を図る。また、ポストドク制度およびTA制度の充実と国際的に通用する人材の育成をさらに推進する。具体的には、食薬相互作用の解明については、新しい研究事例の蓄積をはかる。　食品成分をシーズとした医薬品の創製については、平成１６年４月に薬学研究科に開設された「創薬探索センター」との連携を強化する。　高感度評価系の構築については、集積化マイクロチップ等を用いた超高速分析法の開発と遺伝子レベルでの個別保健医療を目指した研究を積極的に推進する。　臨床疫学研究については、「臨床疫学研究部門」により食品成分の機能性評価のための臨床試験システムをさらに進展させる。独立行政法人国立健康・栄養研究所および国立医薬品食品衛生研究所と連携して、新規の保健用途表示のために必要な基準の科学的根拠を提供する。特定の食品・医薬品併用時の薬効・機能性と安全性を明らかにする食薬融合研究を重点的に推進する。臨床疫学研究の推進により臨床試験をコーディネートできる人材の養成を積極的に行う。これらの事業が本学のみならず、国内外の大学や試験研究機関との研究連携とともに県が推進する東部のファルマバレー、中部のフーズサイエンスヒルズ、西部のフォトンバレー等との事業連携を通してより一層加速され、充実したものになることを期待している。



事業推進担当者

生活健康科学研究科	●教授	木苗	直秀	教授	伊勢村　護
○食品栄養科学専攻	助教授	大橋	典男	助教授	熊谷　裕通
○環境物質科学専攻	助教授	合田	敏尚	教授	小林　裕和
●拠点リーダー	教授	寺尾	良保	教授	中山　勉
	教授	横越	英彦	助教授	渡辺　達夫
薬学研究科	教授	今井	康之	教授	奥　直人
○薬学専攻	助教授	菅谷	純子	助教授	鈴木　隆
○製薬学専攻	教授	鈴木	康夫	助教授	武田　厚司
○医療薬学専攻	教授	出川	雅邦	教授	豊岡　利正
	教授	野口	博司	教授	山田　静雄

拠点アドバイザー
・北川　勲(大阪大学名誉教授)
・長尾　拓(国立医薬品食品衛生研究所長)
・廣部雅昭(静岡県学術教育政策顧問)
・家森幸男(WHO循環器疾患予防国際共同研究センター長)

文部科学省より「発展型都市エリア事業」に採択される

―究極の産学官連携をめざす―

研究統括　食品栄養科学部長：木苗直秀

本年４月に文部科学省より、本県中部地域が新たに発展型都市エリア事業（平成１７年度－１９年度）に採択された。これは平成１４年度から１６年度に実施された一般型都市エリア事業に継ぐものであり、公募件数１４件のうち５件のみが採択されるという厳しいものであった。一般型事業の「心身ストレス克服をめざした高感度バイオマーカーを用いた評価システムの構築と食品、医化学品素材の開発」で得られた研究・開発成果をもとに、発展型事業では「心身ストレスに起因する生活習慣病の克服をめざしたフーズサイエンスビジネスの創出」をテーマとして事業展開することになっている。本事業では２１世紀における健康長寿社会の確立に向けて、食物成分の抗ストレス機能の解明とともにそれら有効成分を利用して生活習慣病の克服をめざすものである。年間２億円計６億円が予定されているが毎年事業評価が実施されることになっている。

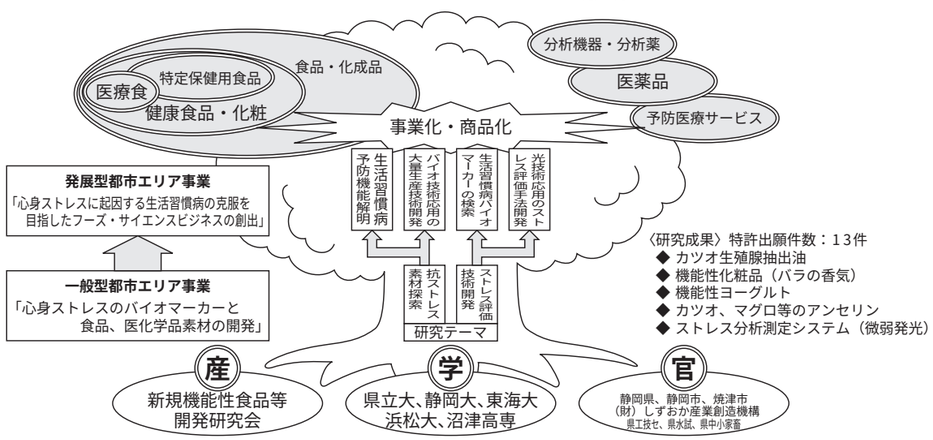
本事業では、研究テーマ１「ヒトの生体分析・評価・高機能化技術の開発とビジネスへのアプローチ」、研究テーマ２「光技術を用いた非侵襲病態解析とビジネスへのアプローチ」、研究テーマ３「酵素工学的手法を用いた高機能化素材創生技術の開発とビジネスへのアプローチ」、研究テーマ４「抗ストレス食品・化成品素材の開発及び発現機構の解析とその応用製品への展開」の４つの研究テーマを設定した。

これらの研究に関わる研究者及び参画企業が密接に連携し、抗ストレス作用を示す食品素材や食品の探索、ストレスに起因する病態の改善・予防機能発現機構の解析、安全性の確認、ヒト介入試験を通して食品素材やその応用製品の開発をめざすものである。

また植物香気成分等の機能成分の生成に関わる人為的改変機能高分子（酵素）を用いた機能成分大量生産系を確立する。さらに、プロテオーム解析によるヒト血中のストレスマーカーの探索やその評価技術、及びＰＥＴや近赤外等の光技術を活用した非侵襲リアルタイム生体解析技術の創出を行い、食品の摂取や化成品の利用における改善効果の新しい分析・評価法や解析・診断装置を開発し、抗ストレス食品や化成品等の効果を評価する。

なお、本事業には本学（薬学部、食品栄養科学部、環境科学研究所）、静岡大学（農学部、理学部、教育学部）、東海大学（海洋学部）、浜松大学、沼津高専とともに静岡工業技術センター、水産試験場をはじめとする公的試験研究機関、食品・医薬品・化学系企業が参加しており、しずおか産業創造機構、県商工労動部が事務、事業統括等を担当している。

フーズ・サイエンスヒルズの形成



図書館だより

附属図書館長に就任して

附属図書館長　中山慶子

この４月に附属図書館長に就任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

新たな大学像が模索されている今、大学図書館のあり方、使命も大きく変化しつつあります。大学の一部としての目的、課題の再確認と、グローバルな情報環境の変容の中での知的遺産管理、先端情報提供のシステムの模索が緊急な課題です。

一般的整備はもちろんですが、大切なことは、静岡県立大学のメンバーにとって、利用しやすい、親しみやすい固有のシステムの構築と整備であろうと思います。このためには、メンバーであり、利用者である皆さまとの連携を密にし、フィードバックを制度化していく必要があると考えています。皆さまのご協力を仰ぎ、進めて行きたいと思います。よろしくご指導ご協力くださいますようお願い申し上げます。

これからの取り組みのパースペクティヴを少し述べたいと思います。

大学図書館の第一の使命として、教育研究活動に必要な学術情報を安定的に提供する役割があります。これは大学における学術情報のシステムを構成する重要な基盤でありますが、近年、学術情報は紙媒体から電子媒体へ急激にシフトし、学術情報そのものが図書館を経由しないで直接利用者の手元に届くようになっています。電子ジャーナルはその代表的なもので、空間的、時間的な制約を受けずしかも同時に複数のアクセスが可能という従来の紙媒体にはない特徴をもっています。大学図書館は、こうした変化に対応した、新システムの導入、サービス、組織運営へ向けて、たゆまぬ点検と改革が必要です。一方で利用者のアクセシビリティを高めるため、情報センターとも協力して、京都大学が行っている全学共通科目の「情報探索入門」なども検討して行きたいと思っています。

また、大学のメンバーに対し、および県図書館の一つとして地域に対して、利用する人々の生活の質（QOL）の向上に資する情報、サービスの提供という役割があります。生活、人生を豊かにするアイテムとして、本とのほんとの出会いをプロデュースして行ければと考えています。「人生を変えた１冊の本」といったエッセイのお願いや、「学生に勧める100冊の本」など、新しい方式で進めていこうと検討中です。また、新蔵書紹介や、世界の図書館の話なども、ホームページを活用して進めていきたいと考えています。「図書館に行けば、何かある！」と思えるように。

新たな時代の中で、 それにふさわしい図書館を目指して努力を続けたいと存じますので、今後も積極的に附属図書館を活用していただくとともに、附属図書館のあり方について利用者の皆様のご理解とご協力を心よりお願いいたします。

本学教員からの著書寄贈

先生方から著書を寄贈していただきました。（平成17年4月以降）
図書館自由閲覧室の教員著作コーナーに配架して利用に供します。

◎東郷 吉男 名誉教授　「よくわからない日本語」　実業之日本社　2005年
◎中山 慶子 教授（国際関係学部）　「日本のシンクタンク」（東京大学新聞研究所研究叢書８）　東京大学新聞研究所　1985年
◎芹沢 幹雄 教授（経営情報学部）　「テニスの理論と実践」　三恵社　2005年
◎加藤 善久 講師（薬学部）　「生体統御システムと内分泌撹乱」　シュプリンガー・フェアラーク　2005年

外部資金受入状況

年度別受入状況　（単位：件、千円）

年　度	奨学寄附金		受託研究		共同研究		計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
平成12年度	16	118,100					16	118,100
平成13年度	74	122,410	21	79,107	4	5,719	99	207,236
平成14年度	82	88,389	25	64,532	10	86,700	117	239,621
平成15年度	143	96,364	21	52,055	7	65,200	171	213,619
平成16年度	130	103,465	27	96,296	12	61,200	169	260,961
計	445	528,728	94	291,990	33	218,819	572	1,039,537

平成16年度受入状況　（単位：件、千円）

区　分	奨学寄附金		受託研究		共同研究		計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
全学	5	2,000					5	2,000
薬学部	61	42,635	10	44,598	7	12,700	78	99,933
食品栄養科学部	34	33,500	6	15,026	5	48,500	45	97,026
国際関係学部			2	18,203			2	18,203
経営情報学部	5	7,000	2	700			7	7,700
看護学部	3	3,230	3	4,700			6	7,930
環境科学研究所	22	15,100	4	13,069			26	28,169
計	130	103,465	27	96,296	12	61,200	169	260,961

＊研究科については、各学部に併せて計上

科学研究費補助金　採択状況

年度別 採択件数

年度	新規課題		継続課題	合計
	応募	採択		
11	150	31	32	63
12	162	27	35	62
13	162	23	30	53
14	177	35	29	64
15	169	31	43	74
16	140	22	48	70
17	156	39	33	72

平成17年度 部局別 採択件数

部局	新規課題		継続課題	合計
	応募	採択		
薬学部	71	19	12	31
食品栄養科学部	28	4	4	8
国際関係学部	10	6	3	9
経営情報学部	7	1	3	4
看護学部	11	3	5	8
生活健康科学研究科	13	3	3	6
環境科学研究所	16	3	3	6
合　　計	156	39	33	72

※国際関係学部には、国際関係学研究科を含む。

平成17年度 研究種目別 採択件数

研究種目	新規課題		継続課題	合計
	応募	採択		
基盤研究（S）	0	0	0	0
基盤研究（A）	0	0	0	0
基盤研究（B）	20	4	2	6
基盤研究（C）	65	15	18	33
萌芽研究	22	2	3	5
若手研究（A）	0	0	0	0
若手研究（B）	33	11	9	20
特定領域研究	13	4	0	4
特別推進研究	3	3	1	4
合　　計	156	39	33	72

平成17年度に新規採択された研究課題及び研究者

基盤研究（B）

野口博司	薬学部	教授	植物有用成分生合成遺伝子情報を用いた新規非天然型化合物開発
横越英彦	食品栄養科学部	教授	心身ストレスの克服と食品成分による情動制御に関する研究
鈴木康夫	薬学部	教授	高病原性トリインフルエンザウイルスのヒトへの伝播機構の解明とパンデミック阻止
六鹿茂夫	国際関係学研究科	教授	拡大EUの「欧州近隣諸国制策」－イースタン・ディメンションをめぐる政治過程

基盤研究（C）

小林公子	食品栄養科学部	助教授	生活習慣病の発病に関わる食生活と遺伝要因の相互作用に関する研究
橋本伸哉	環境科学研究所	助教授	必須元素ヨウ素を含む揮発性有機化合物の海洋バクテリアによる生成に関する研究
岩堀恵祐	環境科学研究所	教授	腸球菌を新たな指標とした公共用水域での糞便汚染評価手法の構築
大楠栄三	国際関係学部	助教授	書き出しと作中人物導入手法の研究：1880年代スペイン小説における変容過程の分析
吉村紀子	国際関係学部	教授	アカデミックコミュニケーション能力の養成を目指す海外短期英語研修プログラムの構築
森山　優	国際関係学部	講師	日米開戦と情報戦－政策決定システムとの関係を中心に－
渡辺和雄	経営情報学部	教授	電子商取引における電子情報仲介業の役割と戦略
中山　勉	食品栄養科学部	教授	生体膜における植物ポリフェノールの動態解析
久留戸涼子	食品栄養科学部	助手	エストロジェン類の塩素処理副生成物のエストロジェン作用に関する研究
豊岡利正	薬学部	教授	酵素転移反応を利用した高感度糖鎖構造解析法に関する研究
田辺由幸	薬学部	助手	バイオメカニカルストレス反応による脂肪細胞の分化機能制御とその分子機構の解明
山口正義	生活健康科学研究科	教授	多機能性蛋白質レギュカルチン遺伝子の臓器特異的発現を調節する転写因子の解析
出川雅邦	薬学部	教授	内分秘かく乱物質による毒性発現とその動物種差・性差・年齢差の解析
福島　健	薬学部	助教授	統合失調症モデル動物における脳内神経伝達分子のinvivo解析に関する研究
菅　敏幸	薬学部	教授	アミロイドβペプチドの産出を担うγセクレターゼの機能解明

萌芽研究

津富　宏	国際関係学部	助教授	割れ窓理論の犯罪抑止効果の実証研究
樋口まち子	看護学部	教授	高齢化に対応した地域医療システムにおける代替医療プログラムの開発

特定領域研究

奥　直人	薬学部	教授	難治がんの克服を目標とした腫瘍新生血管標的化DDSに関する包括的研究
阿倍郁朗	薬学部	講師	スクアレン環化酵素活性中心探索プローブと超天然型ステロイドの創出
上村和秀	薬学部	助教授	Notchシグナルに関与するO-フコース型糖鎖の細胞分化・臓器形成における役割
菅　敏幸	薬学部	教授	γセクレターゼ阻害剤探索と分子レベルでの機能解析

若手研究（B）

竹村ひとみ	看護学部手	助手	新たな作用メカニズムに基づく食品成分中のホルモン依存性癌予防因子に関する研究
宮田直幸	環境科学研究所	助手	微生物集積汚泥によるマンガン酸化物ナノ構造体の生産：新しい微量金属回収法の開発
古田　巧	薬学部	助手	膜蛋白質の選択的切断法の開発と応用
松森奈津子	国際関係学部	講師	前期サラマンカ学派の政治理論－カトリック的近代国家論の生成と展開－
加藤　大	薬学部	講師	精密設計したクロマトグラフィー用高分離カラムの開発
大石真也	薬学研究科	講師	蛋白質－蛋白質相互作用阻害剤の探索を指向した新規化合物評価システムの開発
浅井知浩	薬学部	講師	腫瘍新生血管傷害療法を応用した膵がんに対する新規アプローチ
五十里彰	薬学部	助手	パラセリン－1によるタイトジャンクション新規マグネシウム再吸収機構の解明
上村和秀	薬学部	助教授	血管炎・糸球体腎炎における血清レクチンMBPの役割
河内俊二	看護学部	助手	隔離及び身体拘束の実施における看護判断の実態に関する研究
内田信也	薬学部	講師	インスリン分泌促進薬投与におけるチトクロームP450遺伝多型の臨床的意義の解明

特別研究員奨励費

田中秀弥	薬学研究科	DC2	トリテルペン合成酵素の機能開拓と超天然型新規生物活性物質の創出
内山聡志	生活健康科学研究科	DC2	β-クリプトキサンチンの骨代謝調節機能とその細胞分子機構並びに骨粗鬆症の予防
岩崎有作	生活健康科学研究科	DC１	温度感受性受容体に働く食品成分の探索とエネルギー代謝の作用の解析

継続課題の研究代表者

基盤研究（B）

奥　直人（薬学部　教授）、武田厚司（薬学部　助教授）

基盤研究（C）

小林みどり（経営情報学部　教授）、加藤善久（薬学部　講師）、剣持久木（国際関係学部　助教授）、小久保康之（国際関係学部　教授）
末松俊明（経営情報学部　助教授）、熊澤茂則（食品栄養科学部　助教授）、三輪匡男（薬学部　教授）、貝沼やすこ（食品栄養科学部　教授）
伊吹裕子（環境科学研究所　助手）、安部郁朗（薬学部　講師）、六鹿茂夫（国際関係学研究科　教授）、川瀬光義（経営情報学部　教授）
伊勢村護（食品栄養科学部　教授）、守田昭仁（食品栄養科学部　助手）、今井康之（薬学部　教授）、菅谷純子（薬学部　助教授）
鈴木　隆（薬学部　助教授）、小寺栄子（看護学部　教授）

萌芽研究

中島登美子（看護学部　教授）、湖中真哉（国際関係学部　助手）、前田利男（薬学部　助教授）

若手研究（B）

内藤博敬（環境科学研究所　助手）、佐藤智子（看護学部　助手）、熊坂隆行（看護学部　助手）、谷　幸則（環境科学研究所　助手）
佐藤真千子（国際関係学研究科　助手）、伊藤創平（生活健康科学研究科　助手）、吉成浩一（薬学部　講師）、三宅正紀（薬学部　講師）
西村ユミ（看護学部　助教授）

特別研究員奨励費

南　彰（薬学研究科　PD）

※課題番号順に掲載

研究助成採択

平成１７年度　厚生労働科学研究費補助金（萌芽的先端医療技術推進研究事業）

主任研究者：徳島大学薬学部　助教授　石田　竜弘
分担研究員：薬学部　医薬生命化学教室　講師　浅井　知浩
研 究 課 題：がん新生血管を標的としたAll in oneデバイスによる革新的siRNAデリバリーシステムとがん治療法の開発

平成１７年度　財団法人ソルト・サイエンス研究財団研究助成

助成研究者：薬学部　産業衛生学教室　助手　五十里 彰
研 究 課 題：食塩摂取による新規マグネシウム輸送体パラセリン－１の機能変化とそのメカニズムの解明

平成１７年度　文部科学省科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「研究成果公開発表（Ａ）」

研究代表者：国際関係学部　教授　西田ひろ子
研 究 課 題：中国、マレーシア、フィリピン、米国進出日系企業における異文化間コミュニケーション摩擦

平成１７年度　日本精神科看護技術協会研究助成

研究代表者：看護学部　助手　河内　俊二
研究分担者：看護学部　教授　鈴木　啓子
　　講師　石村佳代子
研 究 課 題：隔離及び身体拘束における看護師による判断の実態に関する研究

受 賞

日本農芸化学会大会で論文賞を受賞

食品栄養科学部微生物生産学研究室からの論文が、2004年度BBB論文賞を受賞した。３月２８日（月）札幌市白石区の札幌コンベンションセンターで行われた日本農芸化学会2005年度大会総会で、平成１５年度生活健康科学研究科博士後期課程修了の菰田俊一君（現在宮城大学食産業学部講師）に賞状と盾が授与された。対象となった論文は、T. Komoda, K. Yoshida, N. Abe, Y. Sugiyama, M. Imachi, H. Hirota, H. Koshino, and A. Hiorta, Tetrapetalone A, a New Lipoxygenase Inhibitor from Streptomyces sp., Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry, 68 (1), 104-111 (2004) で、この論文の内容は、静岡市谷田の土壌から分離した放線菌が生産する新しいリポキシゲナーゼ阻害物質である新規四環性化合物テトラペタロンの単離、構造解析、活性に関するものである。

BBB論文賞は、日本農芸化学会英文誌Bioscience, Biotechnology, and Biochemistryに過去一年の間に掲載された全論文のうち優れた論文（全体の３％以内）に与えられる。

本学教員の著書紹介

『テニスの理論と実践』　経営情報学部　教授　芹沢幹雄

授業、部活動、サークル等でこれからテニスを始める人にお奨めの一冊。なぜラケットやシューズ選びが大事なのか？·などこれだけは覚えておいてもらいたいテニスの基礎的な事項について解説した。主な内容はテニスの基礎知識、基本技術、競技方法、審判法、マナー、ウォーミングアップとクーリングダウン、コンディショニング、障害など。

編著者：芹沢幹雄（経営情報学部教授）ほか
2005年4月1日　三恵社発行（840円）

平成１７年度　静岡県立大学年間行事予定(8月～3月・抜粋)

開催時期等	名称、概要等
8月	「サマースクール2005」 内容：大学院生活健康科学研究科環境物質科学専攻入学希望者対象の講義、実験 担当：地域環境啓発センター
8月1日（月）～3日（水）	「オープンキャンパス」開催 内容：高校生、入学希望者等を対象に学部の概要説明、施設見学、模擬講議等を行う。 担当：学生課入試係
8月3日（水）～4日（木）	「夏休みファーマカレッジ2005」 会場：薬学部棟 内容：県下の高校生を対象に本学薬学部研究室で実験演習の体験入学を実施する。 担当：薬学部
8月7日（日）	「漢方の基礎学習と薬草園見学の会」 会場：大講堂、薬草園 内容：漢方薬に関する基礎学習及び薬草園の見学 担当：薬学部・漢方薬研究施設
8月19日（金）	「キャンパス・ツアー」（県民の日行事） 内容：一般県民を対象に大学の説明、施設見学を行う。 担当：経営課企画スタッフ
8月20日（土）	「環境科学研究所公開」（県民の日行事） 会場：環境科学研究所 内容：一般県民対象の研究所公開 担当：環境科学研究所
8月27日（土）	「親子環境教室」 内容：小学生程度の子供とその親を対象に、お弁当持参で一日実験をしながら環境について考える。 担当：地域環境啓発センター
10月2日（日）	「漢方の基礎学習と薬草園見学の会」 会場：大講堂、薬草園 内容：漢方薬に関する基礎学習及び薬草園の見学 担当：薬学部・漢方薬研究施設
10月8日（土）	「経営情報学部オープンセミナー」 内容：高校生が県立大学で授業を体験する。（セミナー形式） 担当：経営情報学部
10月27日（木）	「健康長寿フォーラム・サテライトシンポジウム」 会場：看護学部棟 内容：県民、学生対象のわかりやすい内容の講演等 担当：食品栄養科学部

開催時期等	名称、概要等
10月29日（土）～30日（日）	「剣祭」 内容：学園祭（コンサート、模擬店、後夜祭等） 担当：剣祭実行委員会
10月29日（土）	「日本の流通５０年シンポジウム（仮称）」 内容：スーパーマーケットの創業と経営行動について、著名経営者等を招聘してシンポジウムを行う。 担当：経営情報学部
10月～11月	「第１９回静岡県立大学公開講座」 会場：県立大学（谷田キャンパス） 静岡文化芸術大学 静岡市産学交流センター 県教育委員会三島分館 県立大学短期大学部（小鹿キャンパス） 内容：一般県民を対象に、公開講座を開講する。 担当：学務（国際関係学部）スタッフ 公開講座委員会
10月～３月	「静岡県立大学大学院ビジネス講座（17年後期）」 内容：社会人向けの大学院レベルの講座を実施 「非営利組織マネジメント講座」 内容：ＮＰＯ関係者等に向けた大学院レベルの講座を実施する。 担当：地域経営研究センター
未定（10月頃を検討）	「静岡県立大学の“産・学・民・官”連携を考える集い」 内容：研究室開放・研究発表 担当：経営課産学連携スタッフ 産学連携推進委員会
11月（３～５回）	「環境科学講座」 会場：静岡市内 内容：一般県民対象に環境に関する話題を提供する。 担当：地域環境啓発センター
11月23日(水)	「環境研究交流しずおか集会」 内容：公的機関、企業、市民等が集まり、環境問題に関する最新の研究の情報交換、環境改善・保全に関する技術の進展、意識の向上を目指す。 担当：地域環境啓発センター
３月	「ＵＳフォーラム」 内容：当年度の研究成果の発表会 担当：経営課産学連携スタッフ

研究室・ゼミ紹介

カンボジアに行こう！！「高校生カンボジアスタディツアー」

国際関係学部　津富ゼミ４年　小澤彩華

私たちのゼミは？

私たちのゼミでは、国際的な視野に立ちながら、地に足の着いた社会貢献を行うことを目的に活動しています。

第１期生は、2004年夏に３日間かけて、静岡県在住の外国人小学生（ブラジル・ペルー・朝鮮）と日本人小学生の交流キャンプ「Little World Camp」を実施しました。子供たちは国籍という枠を越えて友達になり、「Little World 小さな世界」を作ることができました。

この活動は、県立大学の有志の学生たちが引き継ぎました。今年は８月８日から10日の二泊三日の予定で、ただいま、大学生のボランティアスタッフ募集中です（little-world-camp@hotmail.co.jp まで）。

高校生のためのスタディツアーをしたい

私たち第二期生はBRIGHT SMILE CLEAR VISIONと自分たちのグループを名づけて、「高校生カンボジアスタディツアー」を企画しています。スタディツアーは、観光旅行ではありません。世界で起きているさまざまな問題について考えるために、問題の起きている場所を訪ねて、NGOなどの取組みを学び、自分たちのものの見方や考え方を問い直すための旅です。

私たちゼミ生の多くは、大学生になってからこうしたスタディツアーに参加して自ら外へ飛び出し、見て・聞いて・体験することが、自分の形成に重要であることを知りました。同時に、大学生になってからではなく、もっと早く高校生のうちにこの経験をしていたら、大学生活の送り方や将来が有意義になっていたのではないかとも感じました。

これが、私たちが「高校生のためのスタディツアー」への取組みを始めたきっかけです。

↓世界遺産　アンコールワットの日の出（シェムリアップ）

スタディツアーのテーマは？

私たちの企画しているスタディツアーの主たるテーマは「カンボジアにおける児童買春」です。カンボジアでは、内戦後の復興の過程で疲弊した農村から都市へと多くの子どもたちが人身売買されるようになりました。児童売買の問題は、貧困（による児童労働）、エイズの蔓延（による低年齢児への買春需要）、教育程度の低さ（による人身売買防止の失敗）など、カンボジアの抱えるいくつもの問題と密接に関係しています。

児童買春は、このように、他の問題と切り離しては解決できない問題です。私たちは、スタディツアーを、高校生が、児童問題を切り口として、現在の世界について体系的で体験的な理解のできるものとしたいと思っています。

カンボジアの現状

カンボジアでは人身売買の件数が年々増加しています。被害者たちは人身売買や性的搾取に対する知識が乏しく、貧困から抜け出すために売られてしまいます。またカンボジアは、タイとベトナムを結ぶ人身売買ルートとなっており、カンボジア国内では、ベトナムから連れて来られた多くの人身売買の被害者が働かされています。そしてカンボジアからタイの性産業へ行かされる女性や子供も大勢います。

ただ生まれた場所が違うだけで、私たち大学生や高校生と同世代の若者が性的搾取の被害に遭っているのです。

現地での下見から学んだこと

今年の２月中旬、私たちはスタディツアーの準備として、児童買春の問題に取り組むNGOを訪問したり、現地の治安についての情報を収集したりするため、カンボジアとベトナムへ行きました。

カンボジアで、買春被害者を保護し、職業訓練や教育を提供している施設を訪問しました。裁縫の技術を得るために一生懸命訓練を受けている女性、挨拶をすると笑みを浮かべて返事をしてくれる少女をはじめ、様々な人に会いました。彼女たちの過去の出来事を想像すると心が痛みました。

なぜこのような問題が起きてしまうのか…。私たちには何ができるのだろうか…。

このスタディツアーは、高校生のためのツアーであると同時に、私たちにとってのスタディツアーなのです。

私たちにできること…

私たちは、参加する高校生に、現在抱いている興味や関心を行動に移す力を身に付けて欲しいと考えています。

テレビやインターネットを付ければ簡単に情報が得られる今、自分から外へ出て自分の目で見て体験することの大切さを私たちは痛感しています。机に向かうだけでなく人と出会い、外国の問題を身近に感じともに協力し合うことが、グローバル化の進む社会で生きていくための条件なのだと思います。

現在は、８月のスタディツアーを前に、訪問予定先のNGOなどと連絡を取り合い、企画の内容を考えています。６月からは参加者の募集を開始しています。一人でも多くの高校生にこの問題について真剣に考えてもらうことが、私たちが今の世界と次の世代のためにできる貢献なのだと思います。

↑プノンペンのＮＧＯ、ＣＷＣＣにてヒアリング（2005年2月の現地下見から）

〈大学生・高校生の参加者を募集しています！〉

場　　所：カンボジア王国
（プノンペン・シェムリアップ・カンダール）
参　加　費：高校生１５万円、大学生１９万円
対　象　者：
静岡県内に在住の高校生（８名）・大学生（２名）
日　　時：
２００５年8月１８日（木）～8月２７日（土）
ツアー内容：
プノンペン市内のNGO訪問　（子どもとの交流、ワークショップ等）、JICA青年海外協力隊員との懇談会、キリングフィールド博物館見学、ごみ山にてごみ拾い、農村体験、アンコールワット遺跡観光、市場観光

主催団体：BRIGHT SMILE CLEAR VISION
（津富ゼミ第二期生）

TEL：054-264-5268
FAX：054-264-5099／5268
E-mail：tsutomi2nd@yahoo.co.jp
担当：今泉有沙・小澤彩華（国際関係学部4年）

フィリピン大学留学体験記

国際関係学部国際言語文化学科４年　川合　知絵

私は、2004年９月から2005年２月までの半年間、フィリピン大学に交換留学をしました。留学の目的は、「フィリピンの文化や社会を直接体験すること」、そしてもうひとつ、「今までのボランティアやＮＧＯでの活動の経験を生かし、現地でも何かをしたい」という思いも持っていました。留学前に地域言語でフィリピン語さえ履修していなかった私に交換留学のチャンスが与えられたことから、「私だからこそ現地で何かできることがあるのでは？」と考えました。現地でももちろん学業が第一でしたが、この体験記では私の興味の中心であるフィリピンの文化や社会問題について書こうと思います。

「フィリピン大学の概観」

【ごみ山にある学校】

フィリピン大学のあるケソンシティーに、パヤタスという地域があります。そこには、マニラ首都圏最大のごみ集積場があり、大きなごみ山がそびえ立っています。「スカベンジャー」と呼ばれる、リサイクルできるごみを拾って売ることによって生計を立ている人たちが3,000人以上そこで働いています。ごみ山の周りには彼らやその家族が住み、スラムを形成しています。そこに住む多くの子ども達は、貧困や出生証明がないなどの事情から教育の機会を失っています。そんな子ども達のために、フリースクール「パアララン・パンタオ（思いやりの学校）」がごみ山のふもとにあります。フィリピン人女性が校長を務め、日本やシンガポールの団体からの寄付金を元手に運営されています。

「そびえ立つパヤタスのごみ山」

私は、ごみ山に住む人々の生活を知りたいということと、私にできることは何かを探るために、この学校に毎週訪問しました。元気に学校に通う子ども達を見て、校長先生からお話を伺ったり、実際にごみ山に登りスカベンジャーにインタビューをすることで、様々な事実が見えてきました。確かに彼らの生活は困窮していて、状況は深刻です。しかし、そんな中でも、陽気でホスピタリティーに溢れた「フィリピンの誇るフィリピン人」が多くいることに気付きました。彼らの強く生きる姿に圧倒さえされました。

結局、学校のために大した活動はできませんでしたが、校長先生は「あなた達のような訪問者に望むことは、パヤタスの現状や、この学校のことを知ってもらうこと。そして、あなた達の国に住む多くの人々にもこのことを知ってもらいたい」とおっしゃっていました。私はこの言葉を決して忘れず、これからも行動していきたいと思います。

【フィリピン人家族との出会い】

大学であるフィリピン人学生と仲良くなり、彼女は実家のあるタルラック州に度々私を招待してくれました。休暇を利用し、フィリピン最大のイベントであるクリスマスやニューイヤーも一緒に過ごしました。彼女もご家族もとても私に良くしてくれました。

「お世話になったフィリピン家族」

彼らと共に過ごすことで、私の渡比の目的であったフィリピンの文化を肌で感じることができ、いつも発見と感動の連続でした。一緒に手を使って食事をしたり、フィリピンで流行しているダンスを踊ったり、「プスプス」という歯笛のような音を出して猫や人を呼び止めたり、楽しく貴重な時間を過ごしました。また、彼らが信仰の厚いクリスチャンであったことから、宗教について考える機会も多く持つことができました。

帰国直前に彼らの所を訪ねた時、別れ際に８歳の末っ子のジョシュアが泣いてしまい、普段そういう場では泣かない私も涙が出そうになりました。本当に貴重な出会いができて、フィリピンに来て良かったと思った瞬間でした。

「旅行で行ったバナウェの棚田」

フィリピンに滞在した半年間で、多くの素敵な出会いに喜び、フィリピン人との文化や感覚のズレから大変な思いも沢山しました。しかし、おかげで実のぎっしり詰まった留学になりました。同じ境遇、環境にいる人々と多くの意見を交わすこともできました。直接現場を見て、体験することの重要性はやはりとても高いと思います。この素晴らしい経験を決して無駄にすることのないよう、今後、自分にとって最善の道を見つけなければなりません。

「プスプスと呼んだら近づいてきました」

クラブ・サークル紹介

国際交流サークル“ IFC ”

代表：国際関係学部4年　小澤　誠子

こんにちは、初めまして。国際交流サークル IFC です。
IFCは、“ International Friendship Club ” の略称で、留学生と日本人学生とのゆかいな交流サークルです。今回は、私たちIFCの活動紹介をさせていただきます。

●活動目的

県大では多くの留学生が学んでいますが、普段の授業だけで留学生と日本人学生がお互いをよく知り、仲良くなろうとしても難しいですよね。そこで、IFCでは、「お互いに仲良くなり、お互いの国についてもっとよく知りたい！」「グローバルに友達の輪を広げたい！」「日本の文化も世界の文化も楽しみたい！」などという思いを持ったメンバーが集まり、“ お金をかけず、和気あいあいと盛り上がろう♪ ” をモットーに交流活動をしています。

昨年行われたバーベキュー大会

●活動内容

具体的な活動内容は、以下の２種類に分けられます。

1.定期活動…週２回、部室でお昼ご飯を食べながら楽しくおしゃべりします。

2.イベント…多国籍料理パーティ、ディスカッション、清水みなと祭り参加、バーベキュー、ヨット乗船 など。

イベントの内容は、お昼休みなどにみんなでアイデアを出し合って決めていくことが多いです。今年はこれまでに、「いくつかの国の映画を皆で鑑賞する」や、「合宿旅行に行く」、「剣祭で多国籍料理店を出す」などの案が出ています。また、学内だけでなく、他大学や日本語学校、地域の方々など、外部との関わりも広げて活動していくことも視野に入れています。

スリランカ料理の“ さばコロッケ ”作ってます！

今年の新歓パーティでの1コマ。
国際ことば学院の方々も来てくださいました。

IFCは、今後も楽しく活動していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。また、IFCにご興味をもたれた方、ぜひifc_39@hotmail.co.jpまでメールをお寄せください（携帯電話から送信しますと届かない場合があります。初めての方はパソコンからの送信をお勧めします）。一緒に活動を盛り上げていきましょう。お待ちしています！

教職員テニスクラブの紹介と入会のご案内

名誉教授：教職員テニスクラブ名誉会長　小松　俊典

教職員テニスクラブは本学創立の翌年、つまり平成元年７月１日に誕生しました。本学の前身である女子大と薬大それぞれの教職員テニスクラブを母体として新しい大学で勤務する教職員同志がテニスを楽しみながら親睦をはかる目的で発足しました。

（1）会員の資格・会費など

テニスを楽しみたい教職員（家族を含む）ならどなたでも入れます。希望によっては転勤・退職などの理由で大学と縁が切れた後もOB会員として残る事が出来ます。また動物実験センターに勤務する学外職員や各学部・研究室の会社委託研究生等も特別に受け入れた時もあります。会費は年３千円で夏季ボーナスが支払われる７月の給料から天引きさせて戴きます。OB会員は年千円です。

会員数は９０名近くまで達した年もありましたが、今は５月現在で６０名程度です。是非皆さんのご入会をお待ちしております。幹事または会員の誰にでもお声をかけて戴くだけでご入会出来ます。初心者・女性も大歓迎です。

（2）練習・行事など

練習日・時間は特に決めてはいませんが、一応勤務日は昼休み時間（この時間帯は最近出る人が少ないようです）、週末は土曜日（午前１０時～午後１時）・日曜日（午前９時～午後３時）で特に日曜日は出来るだけ初心者のお相手をしております。定期的な行事としては教職員テニス大会（通称スターカップ）があり、春と秋の年２回、レベル別に２～３グループに分かれてダブルスのみを試合毎に抽選でパートナーと対戦相手を決め総合成績で順位を決めます。今年は去る４月２９日に第２４回大会を開催しました。大会終了後は更に一層の親睦をはかるため希望に応じて懇親会をやることもあります。そのほか平成９年以来途絶えていた第５回シングルス選手権大会は一昨年再開しましたが、ダブルス選手権は第５回（平成１０年）大会以来お休みが続いています。

本学学生主催の「三淵杯」（男子シングルス・混合ダブルス）、静大教職員クラブや県大学生テニスクラブとの対抗戦、また県下で行われる各種テニス大会には個人・団体ともに積極的に参加しております。

（3）平成１７年度幹事

薬学部・武田厚司（副会長）
食品栄養科学部・鈴木裕一（会長）
国際関係学部・小幡壮（副会長）
経営情報学部・芹沢幹雄
看護学部・岩本義久
事務局・滝浪元基（会計）

平成１７年度開学記念行事を開催

開学記念行事が４月２０日（水）に開催されました。今年で１４回目の開催になり、昨年に続いて第１部に運動会を開催しました。雨天のため体育館での開催でしたが、120人の参加者があり、ドッジボール、三人四脚リレー、なわとりなど大変盛り上がりました。

第２部は「西垣新学長と何でも語ろう会」を開催しました。法人化による県大のメリットデメリット・学生のキャンパスライフ・学生への期待など、学長、各学部長、学生のディスカッションが行われました。

第３部の「はばたきのつどい（交流会）」では今年サークル・部活動で大いに活躍した団体に与えられるおおとり会賞の表彰式があり、「ボランティアサークルこんぺいとう」と「準硬式野球部」が学長から表彰されました。参加人数500人という予想を超える参加者があり、アトラクションのジャズダンス部、アカペラサークル・ザ・ビバレッジのアリオンによるステージもあり、交流会は大盛況でした。

はばたき寄金からのお知らせ

１　平成１６年度はばたき寄金事業実績

（1）　奨学金の授与

モスクワ国立国際関係大学短期交換留学生（派遣学生３人、受入学生１人）に奨学金を授与した。

（2）文芸コンクール・スピーチコンテストの実施

第８回学生文芸コンクール（６月～１０月）及び第７回学生スピーチコンテスト（１０月３０日）を実施した。

（3）創造力啓発コンテスト（学長企画イベント）の実施

本学の学生を対象として発明やアイデアを募集し、特別奨励賞１件を授与した。

（4）はばたき賞の授与

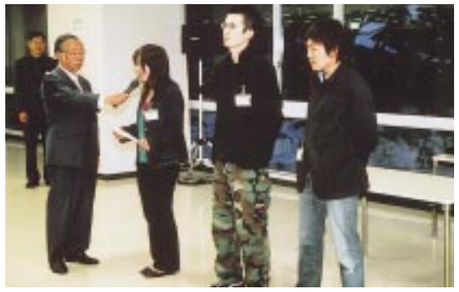
各学部における成績優良卒業生８名に「はばたき賞」を授与した。

（5）おおとり会賞の決定

平成１６年度静岡県大学準硬式野球秋季リーグで全勝優勝した「準硬式野球部」と平成１６年度青少年健全育成強調月間静岡県大会・青少年団体の部表彰の「ボランティアサークルこんぺいとう」の２団体におおとり会賞を授与することを決定した。

（授与式は、平成１７年４月２０日の開学記念行事第３部において実施した。）

おおとり会賞・「準硬式野球部」



おおとり会賞・「ボランティアサークルこんぺいとう」

２　平成１６年度はばたき寄金収支結果

○収入　5,102,675円

内訳	前年度繰越金	4,062,640円
	寄附金	1,040,000円 （教職員、後援会など２４件）
	雑収入	35円（預貯金利息）

○支出　1,009,103円

内訳	報奨等	761,000円
	事業費助成	168,025円
	事務費（賞状筆耕代等）	80,078円

○差引残高　4,093,572円

（平成１７年度へ繰り越し）

（担当　事務局経営課企画スタッフ）

・・・「社会調査士」の資格が取得できるようになりました　・・・

施策策定に必要な資料を集めるための調査をはじめとして、現在では、さまざまな職種、さまざまな部署で各種の社会調査を実施する必要に迫られることが少なくありません。こうした状況を背景に、2003年に「社会調査士資格認定機構」が設立され、「社会調査士」の資格を認定する制度が作られました。

国際関係学部では、この「社会調査士資格認定機構」が認定する「社会調査士」資格の取得に必要なカリキュラムを新たに整備しました。これによって、平成１７年度以降の入学者は、指定された科目の単位を取得し、所定の手続きをとることによって、「社会調査士」の資格を取得できるようになりました。（ただし、審査手数料に15,000円～20,000円が必要となります。）

この資格に関心のある方は、本学ウェブサイトの国際関係学部掲示板をご覧ください。